

京都橘大学女性歴史文化研究所 第二九回シンポジウム
「考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族」Ⅰ

縄文時代の家族と母性

—— 北海道の縄文遺跡を事例として ——

阿部 千春

みなさん、こんにちは。北海道庁縄文世界遺産推進室の阿部千春と
います。どうぞよろしくお願いたします。

私がここでお話をさせていただきつけかけになりましたのは、日本
遺跡学会の二〇一三年函館大会で増渕先生のご縁をいただき、本当
は三年前に行く予定だったのですが、残念ながら、コロナ禍で延期に
なっていました。でも、ちょうどその間に縄文遺跡群が世界遺産登録
になりましたので、タイミングとしてはよかったのかなと考えていま
す。

きょうは縄文時代の家族や母性にふれながら、縄文文化全体の価値
にも触れてみたいと考えています。特に私がフィールドにしている北
海道の遺跡をご紹介します。

本日の骨子ですが、一つは、縄文文化の始まりについてです。旧石

器時代から縄文時代へ変化してきたきっかけは何だったのかということ
ですね。二つめに、縄文は定住社会で、その縄文文化が成立した背景に
は日本列島の生物多様性がありますが、それはどういうものだったの
か。三つめに、定住が始まって人々の暮らしと心がどのように変化し
ていったのか。これを遺跡から読み解いていき、四つめに縄文の思考
と精神性の特徴を、土偶や土器等の遺物からみていきたい。特に男女
の性差のようなものが反映されている遺物がありますので、そこに注
目したいと思います。

そして最後に、縄文遺跡群が世界遺産登録になりましたが、この世
界文化遺産をどうやって活用していくのかという観点で、今後の世界
遺産教育についてもお話をさせていただきたいと思っています。一時
間少々になりますが、どうぞお付き合いください。よろしくお願
いたします。

寒冷・乾燥→温暖・湿潤な気候／遊動→定住

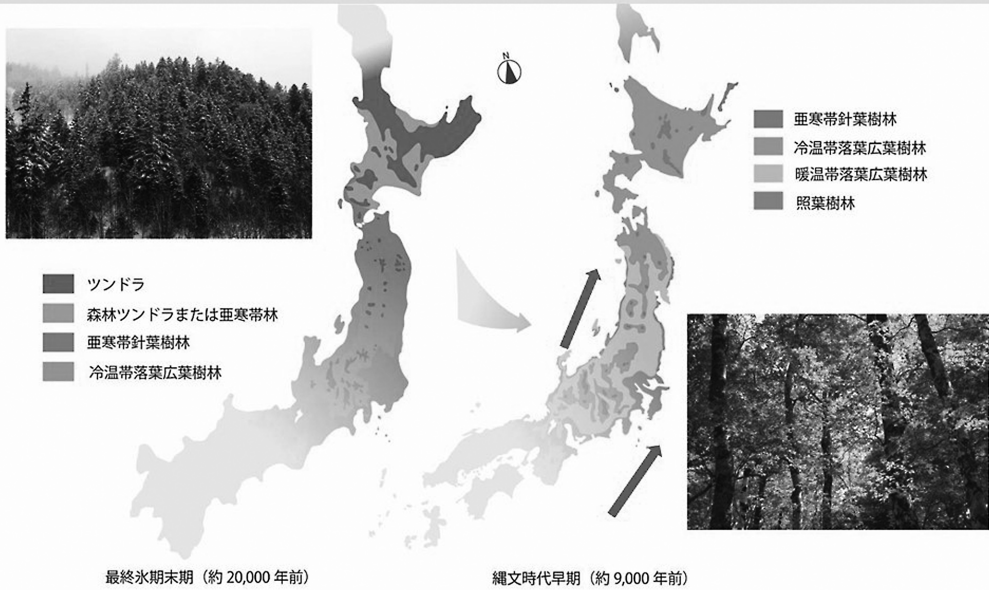


図1 寒冷・乾燥→温暖・湿潤な気候／遊動→定住
(函館市縄文文化交流センターガイドブックより)

まず、地球の歴史ですが、過去一〇〇万年の気候変動を見ると、およそ一〇万年を一つのサイクルにして、八万年の氷期と二万年の温暖期を繰り返していることがわかります。これはミラコヴィッチ・サイクルと言われていますが、地球の自転速度と公転周期、地軸の傾き等が組み合わさり、寒冷期と温暖期をほぼ規則的に繰り返していることとなります。

では、氷河期はどのような生活をしていたかですが、約二万年前の北海道は海面が一二〇mほど低く、サハリンや間宮海峡とつながっていて、ユーラシア大陸から南に伸びた半島の先端でした。

ただ、本州北端と北海道との間に広がる津軽海峡は、深さが一四〇m以上ありますから、二万年前もつながっていなかったのです。したがって、動物の生息状況にも違いがあります。たとえばクマは、北海道はヒグマで、本州はツキノワグマです。そして、北海道にはサルとイノシシがいらないといった違いがあります。

氷河期の人びとは、動物の骨にカッターの刃のような薄い破片を埋め込んだ道具を使って、マンモス、オオツノシカ、バイソン等の大型動物を追いながら、大陸から北海道に入ってきました。本州では、ノウマンゾウを追いながら、人間が遊動生活をしているわけです。食料となる動物が移動するから、人間もそれに合わせて移動していたこととなります。

ところが、一万五〇〇〇年ほど前に急激な地球規模の温暖化が始まります。そうすると、海面が一気に上昇して、対馬海峡が開き、対馬海流(暖流)が流れ込んで、黒潮も北上します。それによって、冬は

対馬暖流の上げる水蒸気にシベリアからの冷たい風がぶつかって大雪を降らせ、夏は太平洋で発生した雨雲が台風になって大雨を降らせる、というような状況に変化します(図1)。

そうした変化によって、それまで生息していたマンモス動物群は絶滅していきます。なぜかと言いますと、氷河期は、寒いけれども乾燥していて雪が降らないので、冬でも草を食べることができませんが、温暖・湿潤な気候になったために、特に東日本などでは冬に大雪が降って、食料となる植物を得ることができなかつたためだろうと思います。

そうした環境変化のなかで、人間の生活はどのように変化したかといえますと、森は落葉広葉樹に変わり、海水面の上昇によって前浜では貝や魚を捕れるようになり、雨によって発達した河川にはサケやマス等が遡上してきます。これにより、身の回りの自然資源に依って暮らすことができるように対応してきたのです。

日々の食料が固定化されたので、人間の生活も固定化する。これが定住生活の始まりであり、ここから縄文文化が始まったと考えられています。

縄文文化は、一万五〇〇〇年前から二三〇〇年前までが日本列島に続いた先史文化です。その特徴は、日本列島の多様な自然環境のなかで、漁労・狩猟・採集を生業として定住生活を実現し、一万年以上も大きな争いもなく存続したことであり、「定住生活」がキーワードになります。

ヨーロッパ大陸や中国大陸でも定住が始まりますが、世界的に見る

と定住というのは、農耕(麦や米の栽培)や牧畜(ヒツジや牛の飼養)によって食料を計画的に確保・貯蔵する仕組みができて初めて成立します。しかし、縄文文化は、自然環境の恵みだけで定住生活を実現し、それを発展・成熟させたところに一番の大きな特徴があります。

その後、本州は稲作を主体とした弥生時代から古墳時代、飛鳥時代へと続きますが、北海道の場合は、縄文時代が終わった後は、狩猟・採集の伝統を引き継いだ続縄文文化に変わり、次にサハリンから北方民族が南下してオホーツク文化が広がり、そして本州の擦文文化と融合してアイヌ文化に変化していくという、独自の歴史の流れがあることも知っておいていただきたいと思えます(図2)。

では、縄文文化は自給自足だけをしていたのかというと、そうではありません。現代につながる高い工芸技術もありましたし、津軽海峡を挟んで本州と活発な交易もしていて、三五〇〇年ほど前の土器や漆塗りの櫛などが出土しています。櫛は、素材が木ですから、歯は腐って残っておらず、下地に黒漆を塗った上に赤い漆を重ねています。現在の漆工芸もまったく同じ技術を使っています。

それから、ヒスイの装飾品も出土しています。ヒスイは非常に硬い鉱物です。一番硬いのは硬度一〇のダイヤモンドでヒスイは硬度八ですが、ダイヤモンドが整然とした分子構造のために一定方向に割れやすいのに対して、ヒスイは分子構造が絡み合っているので非常に硬く粘り強い。それに孔を開けて勾玉のペンダントや小玉のネックレスにするわけです。柔らかい木の軸の先に砂を付けて回転させ、砂の中の

縄文文化の概要

	B.C.13,000	B.C.9,000	B.C.5,000	B.C.3,000	B.C.2,000	B.C.1,000	B.C.300	A.D.300	A.D.600	A.D.800	A.D.1,200
日本	旧石器時代	縄文時代					弥生時代	古墳時代	飛鳥奈良時代	平安時代	鎌倉時代
		草創期	早期	前期	中期	後期					
北海道	旧石器時代	縄文時代					続縄文文化		擦文文化		アイヌ文化期
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	オホーツク文化	トビニナイ文化		
西欧	旧石器時代	中石器時代	新石器時代	青銅器時代		鉄器時代	ローマ帝国				



【概要】 日本列島の多様な自然環境のなかで、漁労・狩猟・採集を生業として定住生活を実現し、1万年以上も大きな争いもなく存続した先史文化

図2 縄文文化の概要

石英など硬い鉱物の回転によって穴を開けたのだろうと考えられます。ヒスイは、日本人に一番なじみの深い宝飾ですが、すでに縄文時代から大切にしていたということです。

それから、天然のアスファルトも出ています。当時は接着剤として、割れた土器をくっつけたり、釣針と糸をつなぐところを補強したり、矢柄と矢尻をくっつけたり、いろいろなことに使っていました。

分析したところ、この天然のアスファルトは秋田県の昭和町周辺から持ってきたものだということがわかっていますし、ヒスイは新潟県の糸魚川市を流れる姫川の辺りにしか産地がありませんから、それが北海道まで来ていたわけです。つまり、単純に自給自足だけをしていた文化ではなく、活発な交易もしていたということです。

では、なぜ日本列島では自然の恵みだけで定住生活ができたのかということですが、これはおそらく日本列島の形成過程と大きな関係があるのだろうと私は思っています。日本列島周辺は、太平洋プレート、フィリピン海プレート、ユーラシアプレート、北米プレートという四つのプレートに囲まれています。このプレートは年間二〜三cmを移動していて、特に太平洋プレートがユーラシアプレートの中に潜り込んでいます。

こうした活動によって、陸地では高い山から低い盆地まで、海洋では浅瀬から大陸棚、そして世界有数の深海である日本海溝というように、狭いエリアの中で高低差の激しい地形が生まれています。陸上の生物についてはその高度によって生息域が変わり、海洋の生物につい

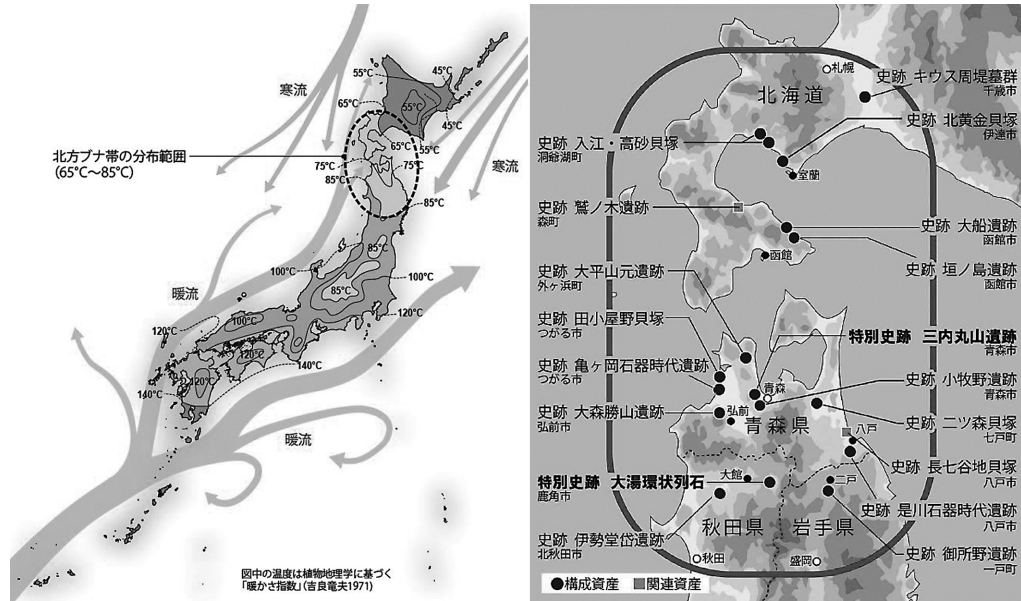


図3 暖かさ指数の分布(左)と構成資産の範囲
(世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」パンフレットより)

ではその深度によって生息域が変わりますが、狭いエリアの中で縦軸方向に距離を持つ地形が日本独特の生物多様性を生んでいるのだろうと思います。

この陸と海から生みだされた日本列島の自然の生物多様性は、私たちは当たり前と思っているかもしれませんが、世界から見ると特筆すべきものがあるのだらうと思います。こうしたプレート活動によって、自然の生物多様性が生まれ、それをベースに自然の資源だけで定住する縄文文化が成立したのではないかと考えているところです。

この自然の恵みを与えてくれる基となったプレート活動ですが、一方ではその活動によって大きな地震が起きたり、津波が起きたり、火山が噴火したりすることがあります。それは縄文時代だけでなく、現代に生きる私たちも経験していることです。自然は生きるための食料を与えてくれるけれども、一瞬にして私たちの生活や命までも奪ってしまうものだということを、縄文時代から私たちは経験しているのだらうと思っています。それが日本独特の自然観、つまり「自然をコントロールする」というよりは「人間は自然の中で生かされている」というような感覚を持つことになったのだらうと思いますし、そのことが最も如実に現れたのは二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災だったのだらうと思います。

あのニュースが世界中に流れたとき、世界の人は何に驚愕したかという、あれだけの自然災害に遭いながら東北の人たちは整然と行動していたということです。これが他の国であれば大暴動になっていた

世界遺産としての縄文ストーリー

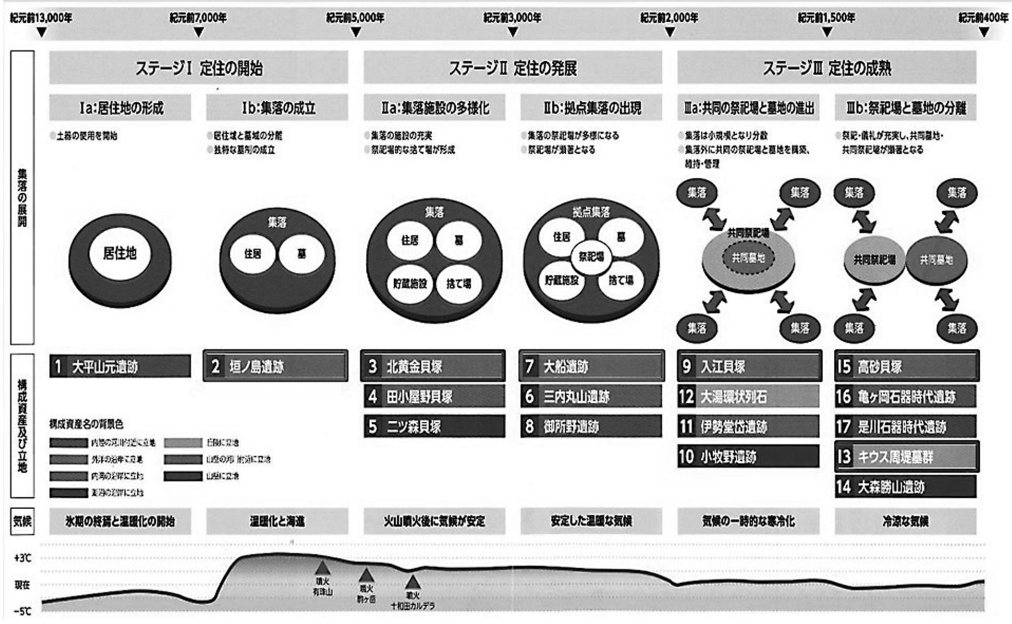


図4 集落展開及び精神文化に関する6つのステージ
(世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」パンフレットより)

ことでしよう。私は「やはり縄文の血が流れているな」と感じました。唯一、怒りをあらわにしたのは人間が造った原発の事故に対してですね。それが日本の自然観なのだろうと思います。

次に、北海道と北東北の縄文遺跡群についてお話ししたいと思います。世界遺産に登録された構成資産がある範囲は、北海道の石狩低地帯以南、青森県全域、それに秋田・岩手両県の県北です。全部で一七の遺跡が四道県一三市町に分かれていて、そのうち北海道には六遺跡があります(図3)。

当然、北海道の北にも東北地方の南にも、いい遺跡はたくさんあります。では、なぜ縄文遺跡は先ほど挙げた地域だけなのでしょう。縄文文化というと、日本列島全体に同じ文化が広がっていたと思われるかもしれませんが、じつは大きく六つくらいの文化圏に分かれています。いまでも北海道の道東と道南では気候風土が違いますし、東北、関東、関西、九州のそれぞれに違いがあると思いますが、そういう現在の違いよりもっと大きな違いのある文化圏があったということです。

では、この地域にはどんな特徴があったのでしょうか。植物の生息には五度以上が必要ですが、年間でどれだけ五度以上あったかを図にすると(温量指数)森林相と合致します。この地域は落葉広葉樹林でも北方の特徴を持っていて、ブナ林が低地まで広がっています。要するに、森林の状況としては北の生態系と南の生態系が混じったようなところ。そして、海洋では寒流と暖流が交わる地域です。

ですから、森の資源でいえば、ドングリも食べられるけれどもブナの実も食べられるとか、海洋では、寒流魚のサケやマスも獲れるけれども、暖流魚のマグロやブリなども獲れるという、二つの特徴を持っていることがわかります。そのためかどうかはわかりませんが、縄文時代が一番古い段階の遺跡から一番新しい段階の遺跡まで、この地域の中でそろいます。

そして、一万年を超える縄文時代にも気候変動があり、その環境の変化に合わせて人間の暮らしがどう変化したというストーリーに「顕著な普遍的価値」があるとして世界遺産に登録されたわけです。同じ環境の中での人類の営みを証明しているだけなので、これらの遺跡だけが凄いいわけではないのです。

世界遺産としての縄文ストーリーは、定住の開始、定住の発展、定住の成熟という三つのステージになっています(図4)。定住というと、現代の私たちも定住していますので、当たり前じやないかとあまり関心を持たれないかもしれませんが、先ほど申しましたように、人類史としては氷河期の遊動生活をしている期間のほうが圧倒的に長いわけですから、定住というのは人類史にとって一つのビッグイベントなんです。その遊動生活から定住に変わったことよって、生活と心がどう変わっていったかということはこの一七遺跡でみていくことになりました。

最初の段階では、本格的な定住はしていません。一時的な定住が数千年続きます。そして、本格的な定住が始まり、その後、集落内に食

料を貯めるための貯蔵穴など、いろいろな施設が増えて拠点集落に発展します。しかし、四二〇〇年前から四〇〇〇年前頃には世界的な寒冷化が起き、大規模な集落が分散して、小さくなっていき、その中で環状列石のような共同の祭りの場ができてきます。その次には、祭りの場から集団墓地が発展して、分離していくという大きな流れがあります。

それでは、北海道の構成資産をみていきたいと思えます。最初は函館市の垣ノ島遺跡です。太平洋に面した小さな岬状になったところの先端部にあります。時期的には九〇〇〇年前から三二〇〇年前まで断続的になりますが、世界遺産としての位置づけは約七〇〇〇年前の時期になります。本格的な定住が始まったことを証明しています。

この遺跡は、居住域と墓域が分離しています。いまま墓地や霊園がありますから、縄文時代にも墓域があるのは不思議でも何でもありませんが、それまで遊動生活をしていた人たちは、そこで食べたものはそこに置き、そこで亡くなった人はそこに埋めて、再び移動していきますから、大きな墓地は持たないし、持てないのです。

ところが、堅穴住居を作って家族が暮らし、一箇所に集まって長期間集落が存続することよって、その集落で生きる人たちの居住域と、そこで亡くなった人たちの墓域が分離して造られるようになります。これも、定住が始まったことによる画期的な出来事です。

そして、堅穴住居を掘ると、石錘(セキスイ)がたくさん出てきます。単なる平べったい石のようですが、よく見ると両端を打って、縄を括



図5 足形付土板(函館市教育委員会所蔵)

るための溝があります。魚を獲るための網の錘なんです。つまり、それまで大型の動物を追いかけていた人たちは、次に海の魚、さらにはオットセイやイルカといった海獣類をターゲットにして、漁労を行うようになったということです。ちなみに、この石錘が出た住居を、地元では「セクスイハウス」と呼んでいます(笑)。

次に墓ですが、資料にお示した墓は、人が写っているので大きさがお分かりいただけるかと思えます。おそらく五体くらい葬られた合葬墓です。その他、一体ごと埋葬した単葬墓もあります。これらの墓から一七点の足形付土板が、きれいな石器とともに出ています(図5)。

一つ一つ見ていきます。この土板の大きさは、長さ一三・七cm、幅一〇cmですが、親指から小指まで指の跡があり、ちょこんと踵の跡もあります。足の大きさは九・四cmで、紐を通すような穴が空いています。

また別の土板は、両足ではなく左足で、足の大きさは一〇・七cmほどです。次の土板は片足で、親指から小指があり、踵もあります。大きさは一一・七cmです。特徴的なのは必ず穴があるということで、穴

は一つのものや二つのものがあります。このほかにも足の大きさが七・五cmとか九・二cmの土板があり、一番小さいのは七・二cmです。注目していただきたいのは、ピタッと押し付けた指の跡ではなく、むりやり指を押し付けたように見えるところです。子どもの指先だけを粘土板に押し付けているわけです。

また、足の大きさが九・四cmの片足が付いたこの土板は、土圧で割れています。裏側には大人の指の跡もあります。粘土板が軟らかいうちに手に持って、子どもの足に付けるので、大人の指の跡が付いたのだろうと推測できます。親の指の跡が付いた土板は、ほかにも何点か出土しています。

これは足の大きさが八・八cmの両足の土板です。割れていますが、土圧で割れたのでピタッとくっつきません。こちらの片足六・九cmの土板は、割れた隙間がかなり空いています。これは土圧で割れたのではなく、墓に副葬する前に割れていたということです。割れてからもずつと持っていたのだと思います。また、ただ持っているだけでなく、おそらく触ったりしたのでしょう。土器はかなりしつかり焼くのですが、この土板はシュークリームかモナカのように、表面だけが焼けています。おそらく住居の炉であぶる程度にしか焼いていない。だから、割れたまま持っている、と、とんとん擦り減って、くっつかなくなった、ということを示しているのだと思います。

穴の部分から欠けている粘土板もあります。これは、粘土板に足形をとった後、家の中で吊るして間に欠けたのだと思います。先ほど言ったように生焼けですから、外に吊るして雨に当たればすぐに溶け

てしまいます。家の中に吊るしていたけれども、そのうちに欠けて落ちてしまった、ということです。

落ちた時に割れてしまい、足形が付いた部分が無くなった粘土板もあります。おそらく、残った欠片だけを大事に持っていたのでしょう。こちらの土板を見ると、モナカのような状況だということがわかっていただけると思います。表面は硬いのですが、中は粘土のままという感じです。水洗いしたら溶けてしまいそうな足形粘土板もあって、それはガラス製の保存剤で固めたほどです。ですから、「ずっと残しておこう」という意志はないのかなと思いました。

これらの土板を目にしたとき、初めは現在の「百日祝い」とか、初めて立ったときの「立ち祝い」のようなものかと思いましたが、それなら足の大きさはだいたい同じになるはずですが。しかし、土板の足の大きさは六cm台から一三cm台と、バラバラです。しかも、それを吊るして、しばらく大切に持っていた。でも、それは生焼けでずっと残そうとしていない。そして、大人の墓から出ていますので、おそらくは幼くして亡くなった子どもの足形や手形を粘土板に写し取って、一定期間、家の中に吊るしておき、親が亡くなったときにその子どもの思い出と一緒にあの世へ行く、というようなことをやっていたのだろうかと考えています。

遊動生活から定住生活に変わって、一つの住居の中で家族が暮らし、その家族がいくつもとまって集落をつくっていく。それによって家族の愛情が深まったり、集落の絆が強まったりして、社会が安定していく、というのが定住のメリットだと思います。

ただ、自然恵みの中で定住するというのは、きれいな事だけでなく非常に厳しい面もあるので、幼くして亡くなった子どもの思い出をこうして残したのだろうかと考えています。

これらの遺物は、私が館長をしていました函館市縄文文化交流センターに展示されていて、それをご覧になった増渕先生が「ぜひ、その話をしてください」とおっしゃって、今回ここに至ったわけです。

次に、入江貝塚をご紹介しますと思います。これは四〇〇〇年前に造られた貝塚です。先ほど、四二〇〇年前から四〇〇〇年前に急激な寒冷化があつて、大規模な集落が維持できなくなり、小さな集落に分散していったという話をしました。実際に、入江貝塚の集落も小さく、堅穴住居も小型のものがいくつかあるだけです。

貝塚には墓があり、人骨も出土しています。縄文人の骨格は大体ガッチリしているのですが、入江貝塚から四肢骨が非常に細い、特徴のある人骨が一体出土しています(図6)。医学的に見ると、一人で立ち上がったらポキッと折れてしまうほどの細さだと言われています。おそらく幼い頃にポリオか筋ジストロフィーなどの筋萎縮症に罹ってしまったようです。しかし、頭骨を見ると成人ですから、成人を過ぎるまで寿命を全うしたことがわかります。特に筋ジストロフィーになると、だんだん自分で呼吸ができなくなっていくようですが、寿命を全うするまで家族や集落の中でケアされながら生きてきたということが伝わってきます。



骨の細さから介護されていたことが分かる(入江貝塚)

銛先、釣り針、牙製品(入江貝塚)

復元された竪穴住居(入江貝塚)

図6 (洞爺湖町教育委員会所蔵)

冒頭に言いましたが、この時期は寒冷化になって、集落そのものが維持できなくなり、分散していきました。そういう厳しい環境にありながらも、弱者に対する相互扶助の精神があふれているというのが、この縄文社会の特徴かなと思っています。

同じく洞爺湖町に、入江貝塚の一〇〇〇年ほど後に形成された高砂貝塚があります。この時期も冷涼化になるのですが、特徴的な墓が見つかっています。その墓は、ベンガラ(第二酸化鉄)の赤い粉をたくさん撒いて、特に丁寧な埋葬されており、お腹の部分から胎児の骨が見つかっています。お産するときに、うまくいかなくて母子ともに亡くなったことを表しているのですが、丁寧に埋葬された状況を見ると、このムラにこれから新しい命が生まれるという喜びが、一瞬にして両方の命を失ってしまった人々の悲しみが伝わってくるようです。

時代が前後しますが、次は少し遡りまして、五五〇〇年前の北黄金貝塚です。貝塚は丘陵の一番高いところに造られており、高さが二mにもなります。貝塚というと、当時食べた貝や魚の骨や動物の骨がたくさん積み重なって、「ごみ捨て場」と言われています。ところが、その貝塚の中にちゃんと丁寧に人の墓を造っています。ですから、貝塚は単なる「ごみ捨て場」ではないことがわかってきました。これについては、後ほどもう少し詳しくお話をします。

大船遺跡は、四五〇〇年ほど前の集落です。この時期は、集落の規



図7 発掘された竪穴住居跡(函館市教育委員会所蔵)

模が一番大きくなる時期で、有名なところでは青森県の三内丸山遺跡などと同じ時期です。

竪穴住居の規模も大きくて、深さ二・四m、長径九mになるものもあり、柱も非常に太いです(図7)。たくさん住居跡が重複していることから、次々と竪穴住居を造っていったことがわかります。また、この集落の人たちを支えた食料(クジラの骨、マグロの背骨、小さな貝類等)や、クリやドングリなどを擦りつぶした石臼などが出ています。

こうした大規模な集落を維持するためには、①集落の構成員が生き残るために必要な食料を確保すること、②その食料の加工・貯蔵ができること、③食料の残滓や使った道具などを上手に廃棄することです。

この三つの仕組みができないと集落は存続できないわけで、これは現在の都市文明でもまったく同じことです。

特に廃棄のシステムが重要です。縄文時代の人々は貝塚や盛土遺構(土器・石器類をたくさん廃棄した場所)を遺しています。一番大きな盛土遺構は、先ほどの垣ノ島遺跡の中の四二〇〇年ほど前の時期ですが、長さ一九〇m、幅一二〇mの馬蹄形で、高さが二mもあり

ます。地面を少し掘ると、土器・石器が大量に出てきます。さきほどの北黄金貝塚と同じように、二mくらい堆積するわけです。

盛土遺構と貝塚について申しますと、盛土遺構は使った道具類(土器・石器など)が主体で、それに動物や魚の骨も混じります。貝塚は貝類・魚骨・動物の骨が主体で、それに土器や石器が混じります。特徴的なのは、どちらもある程度のみとまりで廃棄したら土をかけて火を焚き、何かの儀式をした跡があるということです。そして、どちらにも人の墓が造られています。

ですから、「ごみを捨てる」という私たちの感覚とは違うと思うのです。縄文の人たちは、人間はもちろんですが、動物や植物、道具にも命があつて、それらが役割を終えたときは感謝してその魂をあの世界に送るための儀式をしたのかなと考えています。これは、北海道では後のアイヌ文化に見られる「送り」と共通しているところがあると思っっています。

こうした行為をすることによって、実際には衛生面で集落を守る効果があつたのだろうと考えています。そのまま生ごみを捨てていくと虫が寄ってきて、病気が発生して、集落に人が住めなくなってしまうから、役割を終えたものに感謝してあの世へ送るといような儀式をしながら、そこで火を焚いたりしますので、現実的には衛生的な面で集落を守る効果があつたのだろうと思います。

このような盛土遺構の中には、シカの角で作った縫い針を三つに折って、火を焚いて送っているような事例もあります。日本には針供養という行事がありますが、ハワイのホノルルでアメリカ考古学会が

開かれたときにこの話をしたら、「日本では、いまでもシカの角の針を使っているのですか」と質問されました(笑)。「いいえ、スチール製ですよ」と答えたなら、「どうして金属に感謝するのですか」と言われて、なかなか返答できなかったですね。私たちは道具に感謝する気持ちが当たり前にあるけれども、向こうの人たちにはまったくなくないという、この価値観の違いに気づいて、ハッとしたものでした。

キウス周堤墓群は、非常に大きな集団墓地です。周堤墓とは、円形の穴を掘って、その土を周りに土手状に盛り上げて、その中に墓を造る特殊な形態の墓地です。それがまとまっているのが千歳市のキウス周堤墓群で、一番大きい土塁は直径八五m、高さ五mですから、きょうのシンポジウム会場の天井高よりはるかに高い。それぐらい大規模な共同墓地を造っているのですから、私たちが考えているよりもっと複雑な社会構造があったのだからということがわかります。

それと、先ほどの貝塚や盛土遺構は自然に感謝する「自然崇拜」の場所でしたが、キウス周堤墓群は「祖先崇拜」の場になります。それが発達したのがこの時期の特徴です。一見すると両者は違う信仰に思えますが、私は、当時の人びとにとって自然崇拜も祖先崇拜も同じ意味を持っていたのだからと考えています。共通しているのは、「自分の存在の源になるものへの感謝の念」です。自然がなければ自分たちは生きていけないし、祖先がいなければいまの自分は存在しないのだから、そうした自分自身の根源となるものへの感謝の気持ちが共通するだろうと思います。

もうひとつ、縄文時代の精神性を表すものに土偶があります。土偶は、縄文時代の始まりから終わりまで、ずっと造り続けられています。最初は乳房だけを強調したもので、中間ぐらいになると出産間際のような形になります。まさに命を産む女性というものを象徴して作られているのです。

ところが、寒冷化が始まる後期を境に、男性的な要素も加わるようになり、最後は宇宙人のような格好になったりしますが(笑)、基本的には母性を持った女性像として作られたのだろうと思います。仮面土偶や遮光器土偶でも、女性器が付いていますので、基本的に女性ですね。

土偶において特徴的なのは、ほとんどが壊された状態で出土するということです。北海道で唯一の国宝になっている土偶は、縄文文化交流センターで展示しておりますが、その発見は偶然でした。小坂アエさんという地元の方がジャガイモ畑で穴を掘っていたら、鍬が当たって、ポロッと出てきたのです。「最初はジャガイモだと思って、泥を取ったら目と鼻が出てきたので、腰を抜かすほどびっくりした」と話していました。たしかに顔だけ見ると、ジャガイモに似ています(笑)。

この土偶は「中空土偶」と言って、内部が空洞に作られています(図8)。また、見つかった南茅部町の「茅(カヤ)」と中空の「空クウ」を合わせて、「カックウ」という愛称が付いています。国宝になったとき、保存状態をしつかり調べなければならぬので、市立函館病院に「CTスキャンとMRIを撮ってくれ」と持って行きました

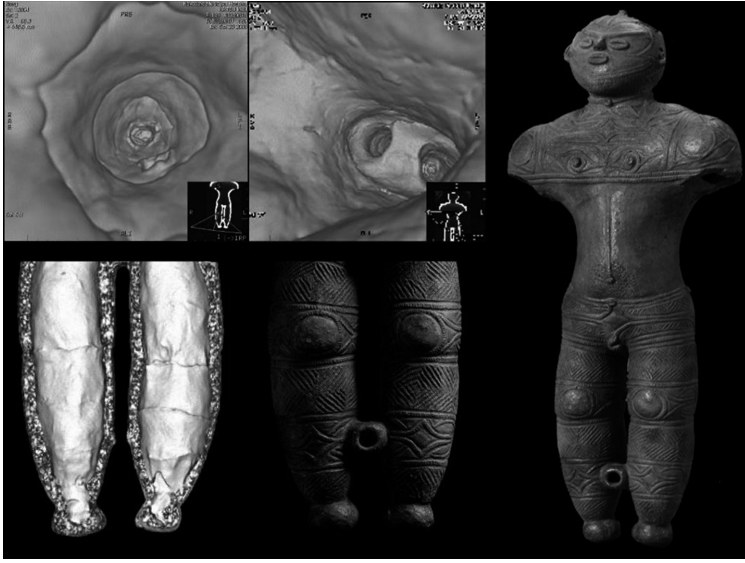


図8 中空土偶(函館市教育委員会所蔵)

が、院長先生に「この機械は人の診察用に購入したので、目的外使用です」と言われて、断られました。それでめげる私ではありませんので、「先生、じつはこの土偶にはカックウという名前があります」と言ったら、先生は「しようがないな。じゃ、『カックウ』という患者名で診察券を作りましょうか」ということで、診察券を作ってくださいました(笑)。「女性ですか?」と聞かれて、「女性ですか?」と聞かれて、「男性ですか?」と聞かれて、「女性

(F)」にしました。「年齢は?」と聞かれて、「三五〇歳」はないので、登録できる中で一番古い明治二年生まれになっています。

この検査で非常におもしろいことがわかりました。空洞に作るためには、粘土紐を輪にして、それを積み重ねていきます。重ねただけだと、この画像のように線がしつかり残るし、この部分はボンと叩いただけでポロッと取れてしまいます。一方、この画像の部分は線がつぶれていますが、これは通常の土器づくりと同じように、重ねた後に壊れないように指でつぶしていくのです。陶芸をやっている方はよくわかると思います。カックウの場合、壊れてもかまわない部分は線がはつきり残っていて、それが模様帯とピタッと合っています。腕の線も取れているし、頭の飾りがあるはずですが、それもきれいに取れています。

これは、たとえば頭の飾りを取るときには、首が取れないように首の部分は厚くするわけです。同様に、腕を取ろうとしたときに、肩から壊れないようにしています。つまり、きれいに作るのではなく、きれいに壊れるように作っていることになります。

このことから、私は、土偶は故意に破壊しているのだろうと考えています。土偶を作るということは命を与えることで、破壊は死を意味します。その破壊が命の再生につながっていくのだ、という思考が縄文社会にあったのだろうというのが私の考えです。

たとえば、物を壊すというのは大きな心的ストレスがかかります。まして人の形をした土偶を壊すということもつとストレスがあります。それにもかかわらず、縄文時代を通して壊し続けるというのは、

縄文の思考が伝わる遺物



注口土器と下部单孔土器(函館市八木B遺跡出土)

図9 縄文の思考が伝わる遺物(函館市教育委員会所蔵)

壊すという行為がその社会の中で意味を持っていないとできないことです。ですから、この土偶は命を産む女性像として、その命の再生・循環への願いが込められているのではないかと思うのです。

縄文の思考がわかる遺物が、もう一つあります。三五〇〇年くらい前の同じ堅穴住居の床面から出た遺物です(図9)。一つは男性を表し

ていて、男性器があり、その下には袋が一つあります。もう一つは、太ももから足首のような曲線が描かれ、下部に女性器を表すと思われる孔があります。色は、男性の土器が黒、女性の土器が赤という対比になっています。また、真上から突起の数を見ると、男性側は偶数の四で円周を分割しており、女性側は奇数の五分割です。要するに、男性と女性、黒と赤、偶数と奇数というように、二つの全く異なる要素によって成り立っているのがこの一對の土器になります。この時期に、こうした下部单孔土器と注口土器が出現するようになります。

漆とヒスイも、同じようなことが言えます。先ほど、墓に赤い粉を撒いたと申しましたが、赤い色は血の色で、生命の象徴でもあります。ところが、死ぬと血が固まって黒くなりますから黒は死の象徴なのだろうと思います。それが一つの器で表現されているのです。ヒスイは、母岩が白で、そこにオンファース輝石の緑色が混じるコントラストになっています。北国にいと、ヒスイはまさしく雪の中から若草の緑が出てくるように感じられます。これも私は、死と生を表現していると解釈しています。

縄文の思考は、「二項原理」で表現できるのではないかと思っています。二項原理というと、西洋では二項対立で、AとBが闘って片方が昇華し、また、次も両者が闘ってどちらかが昇華していくということです。が、縄文の二項原理は二項融合なのだろうと感じています。ですから、男女という単なる性差ではなく、二項があって初めて一つの生命になる、ということではないか。一見すると違うと思うことが、じつは最初から一つのものなのだ、という考え方があっていいのではないかと。

私はそう思っています。

いま、縄文文化への関心が高まっています。それはいろいろな歴史的な発見があったことも確かですが、それよりも社会の変容に伴う価値観の変化があるのかなと思っています。経済成長のときは非常に効率的な弥生文化がブームでしたが、成熟した社会になり、縄文的な価値観になんともなくシンパシーを感じているのかなと思います。そうした時代の流れもあって、世界文化遺産になったのかもしれない。

では、世界遺産とは何かということに少しふれたいと思います。世界遺産は、世界遺産条約(世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約)で定義されていますが、世界中のすごいものを集めるのではなく、文化の振興によって戦争の悲劇を二度と繰り返さない」ということがあり、大きな二つの政策を持っています。ひとつは「文化多様性の保護」、もうひとつは「異文化交流の促進」で、世界遺産はまさにそれを体現するものといえます。

地球上にはさまざまな地域があって、それぞれに歴史や文化の物語があります。そのすべてが大事であって、その中の最も重要なストーリー(顕著な普遍的価値)を世界各国が認め合うことによって、国家間の相互の理解を促進し、国際社会の平和に貢献する。そういう意味が世界遺産にはあります。この条約が結ばれた背景を知るとそのことがよくわかります。

アスワン・ハイ・ダムがナイル川の中流域に造られることになり、アブシンベル神殿が水没する危機に陥ったため、ユネスコが救出を呼びかけて、莫大なお金をかけて水没しない高台に移転させたのです。その直前には第二次中東戦争があつて、スエズ運河を持っているエジプトとイスラエル・イギリス・フランスが戦争をしていました。神殿が移転しているときにも第三次中東戦争が起きました。その対立していた国も、この神殿を守るために協力しています。ですから、文化には多様なものがあり、その価値を認めることによって世界平和を実現することが、世界遺産の目的の一つになっているということです。

世界遺産登録の効果としては、まず文化政策の視点があり、縄文の価値観を世界に発信することで日本文化の理解につながるということがあります。教育的視点としては、自分たちが生まれ育った地域に、世界遺産になるほどの文化があることによって、それが地域社会の誇りになり、まちづくりの原点になっていきます。そして、地域振興の視点もあるかと思っています。特にインバウンドが増えますし、いまの旅行者はこれまでのマスツーリズムと違って、自分自身の変化や新しい価値観に触れることを求めているので、縄文は新しい観光の創造になると思います。

もうひとつ私が注目していることがあります。ユネスコでは二〇〇五年から取り組んでいる「持続可能な開発のための教育」ESD(Education for Sustainable Development)という活動があります。また、

縄文文化と世界遺産活動

ユネスコのESD & 国連のSDGs

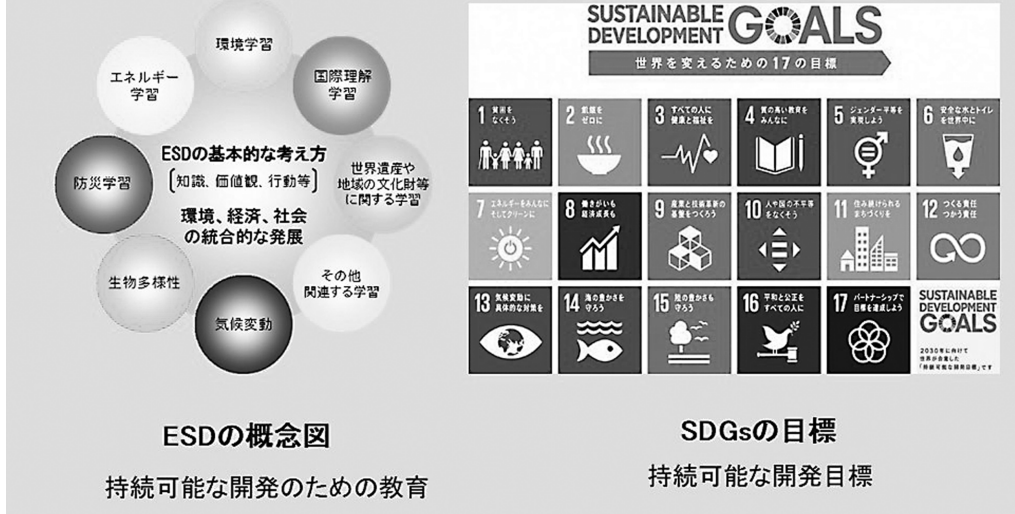


図10 縄文文化と世界遺産活動 ユネスコの ESD_ 国連の SDGs
(文部科学省 HP / 国際連合広報センター HP より)

国連では「持続可能な開発目標」SDGs (Sustainable Development Goals) を進めています(図10)。現在の国際社会には差別、貧困、紛争、過度の開発による自然破壊という問題がありますが、それらをまず自分の事として捉え、できることから行動することによって、より良い社会をつくっていくということがこれらの取組の目的になっています。縄文遺跡群の世界遺産は、こうした国際的な運動に寄与できるのではないかと考えています。

私がアドバイザーを務めている函館市縄文文化交流センターでは、縄文人は何を食べていたのか、いまはどんな生き物がいるのかなどを前浜で観察するとか、シカの釣り針を作って、魚を釣ってみるなどの体験学習をします。体験学習の後は、漁業協同組合の了解を得てウニを一個だけ割って食べてみます。いまの子どもたちは、スーパリーに並んだ魚しか食べていないし、函館の子どもでも生きたウニを割って食べるといって体験をした子はなかなかいませんが、実際にウニを割って食べることで命に対する感謝の気持ちが芽生えます。染め物の体験も遺跡の周辺から四季折々の草花を集めてそれを煮詰めて染料として染め物を作ると、自然への感謝の気持ちが生まれてくるようになります。こうした体験を通して自然と共に暮らした縄文文化の価値を伝えていくことが大切だと思っています。

また、縄文文化は海外からも注目されています。縄文文化交流センターのオープン記念として開催した国際シンポジウムでは二日間とも満員でしたし、大英博物館のOBの人たちは遺跡見学に来て、土器の

模様を和紙で写し取る拓本体験にもすごく熱中していました。パリのユネスコ本部で、私が中空土偶づくりを披露したときは、子どもたちも大喜びでしたし、海外から発掘研修に来る人たちもいます。

最後に、まとめとして次のことをお伝えしたいと思います。

まず、縄文文化に転換したのは地球規模の温暖化という気候変動がきっかけとなりました。また、縄文文化が成立する背景には、日本列島の生物多様性に富んだ自然環境がありました。人間が考えて文化を発達させたと言うより、自然に環境に適応する形で発展してきたのです。

そして、定住が実現したことによって、現代社会に通じる利点(家族や集落の絆など)が生まれた一方で、課題(ごみの問題など)も顕在化するようになりました。縄文時代の人たちは、それにどう対応したかは、これからの現代社会を考える上で貴重な示唆になると思います。

それと、縄文の思考は、他者を否定しない「二項融合」だということ。また、縄文の世界遺産は、特別な人のための建造物とかでなくて、私たちと同じ普通の人が暮らした一万年の歴史の積み重ねです。だからこそ人類共通の根源的な価値がそこにあるのだろうと思っています。その価値を世界遺産教育やESD活動の中で発信していきたいと思っています。

縄文というのは、まったく私たちと関係のない遠い世界の話ではなく、非常に密接につながっているし、現代社会が課題を考える一つのヒントにもなると思っていますので、これからも縄文に関心を持って

いただければうれしい限りです。

ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)